

2022/1/30-2

(オマケの英語教室 never say joke) 書庫版



Never say joke

(冗談言うな)

わが国でも謂わずと知れた一文です。

では、

「ざけんじゃねえ」

は英語で何というか？

「冗談こいてる場合かよ」

はどうでしょう？

「冗談は顔だけにしろ」

は？

最後に

「バカも休み休み言え」

は何といえいいのでしょうか？

日本語では是に類する表現は他にも数多あるのです、実は英語ではこれらが全部

Never say joke

の一言で OK なのです。

例えば最後の文を

Say joke, with rests each time taking (or intervals each time putting)

なんて言っているのを日常英会話で聞いた事ありません。

確かにそんな言い方を聞いた事のない外国人には、それはそれで一興としては面白いかもしれませんが逆に同じ言葉で済んでしまう situation で、こうまで別々の言い方をされると却って戸惑いを覚え、悪くすると気味悪がられる可能性すらあります。

処が我が国の英語教育下では上記の和文の数だけ英訳を施す事を求められます。

それができないとボキャブラリーが乏しいといわれ、場合によっては星の教程のペケを食らい、テストで落第点を貰ったりする事にもなりかねません。

なので、我が国の学生さんは英文和訳問題ならまだしも、和文英訳となると途端に恐怖のどん底に陥って頭の中が真っ白になってしまうケースが多い様です。

(Suddenly Inside their brains are falling into whiteout mode(=panic mode)

是こそが我が国英語教育の「出発時点における最大の違い」だと思うのです。

英語の単語の学習で大切なのは、実は意味の理解やそれが示すところの日本語に訳した時の意味数の多さ(記憶量)でもなく、逆に英語に訳す時の的確さ(ピンポイント精度)でもないのです。

英語教育の取りかかりで大切なのは、

英語の単語は

「単にその基本的な中核イメージ(but it, for Japanese people, little bit looks like not core but fog or air)を示しているだけで、あとは機会に応じてその場の状況で読替えたり組立てたりするものだ」

という認識への転換です。

何故なら日本語の単語の核というのは「単なる中核的なイメージ」等といった曖昧模糊としたものではなく「逐一絞り込まれ限定された固定実在」みたいなものとして捉えられているので、そういった曖昧模糊さ、不確かさがなかなか理解されないのかもしれない。

多分日本の英語学習者はありません「日本語に逐一对応した対訳英語」の亡霊を追いかけただけなのかもしれません。

なので、その愚を繰り返さぬ様、今一度申し上げますと

英語教育の肝は

「単語の中核的イメージの把握とその臨機応変な応用」で、その前提として逆に「日本語とは如何なる言語なのか？」という特性をまず学ぶ事です。

これが所謂「英語脳」の作り方でしょう。

いやいや、事は簡単なのです。

例えば

Have の中核イメージは「持つ」take は「取る」get は「得る」be は「在る」で do は「する」go は「行く」で come は「来る」

それ位掴んでいれば十分なのです。あとの天文学的な数の邦語からの英訳記憶作業は全く余計なのです。

何の事はない、後は中核イメージを臨機応変に読み替えて応用すればいいだけなのですから。